

平成30年度入学（一般入試 前期日程）試験問題の出典

社会福祉学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
総合問題	1	福岡 伸一	新版 動的平衡 生命は なぜそこに宿るのか	小学館, 2017年より	小学館
	2	内山 節	いのちの場所	岩波書店, 2015年より	岩波書店

平成 30 年度 一般入試・前期

## 社会福祉学部

# 総合問題 (120 分)

### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、9 ページあります。なお、下書き用紙が 2 枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

1 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 140 点)

私たちが棲むこの宇宙において、輝けるものはいつかは錆び、水はやがて乾き、熱あるものは徐々に冷えていく。時間の経過の中で、この流れにコウすることはできない。

科学はこれまで人間に可能なさまざまなことをもたらしたが、同時に人間にとって不可能なことも教えてくれた。それは時間を戻すこと、つまり自然界の事物の流れを逆転することは決してできない、という事実である。

これが「エントロピー増大の法則」である。エントロピーとは「乱雑さ」の尺度で、錆びる、乾く、壊れる、失われる、散らばることと同義語と考えてよい。

秩序あるものはすべて乱雑さが増大する方向にフカヒ的に進み、その秩序はやがて失われていく。ここで私が言う「秩序」は「美」あるいは「システム」と言い換えてもよい。すべては、マモウし、酸化し、ミスが蓄積し、やがて障害が起こる。つまりエントロピーは常に増大するのである。

生命はそのことをあらかじめ織り込み、1つの準備をした。エントロピー増大の法則に先回りして、自らを壊し、そして再構築するという自転車操業的なあり方、つまりそれが「動的平衡」である。

しかし、長い間、「エントロピー増大の法則」と追いかけてこしているうちに少しずつ分子レベルで損傷が蓄積し、やがてエントロピーの増大に追い抜かれてしまう。つまり秩序が保てない時が必ず来る。それが個体の死である。

ただ、その時にはすでに自転車操業は次の世代にバトンタッチされ、全体としては生命活動が続く。現に生命はこうして地球上に38億年にわたって連綿と維持され続けてきた。だから個体がいつか必ず死ぬというのは本質的には利他的なあり方なのである。

① 生命は自分の個体を生存させることに関してはエゴイスティックに見えるけれど、すべての生命は必ず死ぬ。これによって致命的な秩序の崩壊が起こる前に、秩序は別の個体に移行し、リセットされる。実に利他的なシステムなのである。

したがって「生きている」とは「動的平衡」によって「エントロピー増大の法則」と折り合いをつけているということである。換言すれば、時間の流れにいたずらにコウするのではなく、それを受け入れながら、共存する方法を採用している。

私たちの皮膚は驚くべき速度で更新されている。皮膚を作る細胞層(真皮)は常に新しい層を作り出し、それを押し上げている。皮膚や髪の毛がそうして更新されているのは比較的たやすく実感することができるが、動的平衡にあるのは、皮膚や髪の毛だけではない。

全身の細胞が1つの例外もなく、動的平衡にあり、日々、壊され、更新されている。皮膚が内側に折りたたまれた消化管や内臓の細胞も、絶え間なく壊されては作り出されている。

細胞の分裂が起こらないとされる心臓や脳でさえ、個々の細胞の中身はどんどん壊され、新しい分子に置き換えられている。一見、永続的に見える骨や歯も、その内部では常に新陳タイシャが進行し、壊されながら作り替えられているのである。

生命は、こうして、フカヒ的に身体の内部に蓄積される乱雑さを外部に捨てている。この精妙な仕組みこそが、<sup>(イ)</sup>生命の歴史が 38 億年をかけて組み上げた、時間との共存方法なのである。

ところが、私たちは時として、その共存方法を無視し、時計の針を逆回転させたい欲求にかられる。額や頬に刻まれたシワを伸ばしたいと願ひ、抜けてしまった頭髪を植え込みたいと願うのである。

しかし、生命現象を支えるサステイナブルな仕組みは総合的なものである。老化の目立つ身体の一部に単一の原因を求め、単一の有効成分に救いを求めようとするのは、悪しき還元主義に陥っていると言わざるを得ない。

たとえば、化学合成された薬物はいつとき身体の一部に劇的な作用を示すが、まもなく身体はその揺れを戻して作用を無効にしようとする。生命現象は動的平衡なのだから。

また、セイセイされた薬物を摂取するより、同じ薬物を含んだ薬草を丸ごと食べたほうが効果があることがしばしばある。それは薬草に含まれるものが単一の成分ではなく、複合的なスペクトルを持った薬物群であり、それらが生命の動的平衡を押ししたり引いたりして、バランスを回復するのに有効だからと考えられる。ここでも単一の成分による単一のベクトルだけで作用を考える還元主義の限界が露呈している。

② 私たちにできることはごく限られている。生命現象が本来の仕組みを<sup>とどこお</sup>滞りなく発揮できるように、十分なエネルギーと栄養を摂り(秩序を壊しつつ再構築するのに細胞は多大なエネルギーと栄養を必要とする)、サステイナビリティ(注)を<sup>そがい</sup>阻害するような人為的な因子やストレスをできるだけ避けることである。つまり「普通」でいるということが 1 番であり、私たちは自らの身体を自らの動的平衡にゆだねるしかない。

かくして私たちは極めてシンプルな<sup>しんげん</sup>箴言(注)に出会うことになる。それは、アンチ・アンチ・エイジングこそが、エイジングと共存する最も賢いあり方だということである。

(福岡伸一『新版 動的平衡 生命はなぜそこに宿るのか』, pp.275-279, 小学館, 2017 年より, 一部改変)

(注) サステイナビリティ 持続可能

箴言 戒めの言葉, 教訓の意味を持つ短い言葉

問 1 下線部(ア)~(オ)のカタカナを漢字に直しなさい。

問 2 二重下線部①「利他的なあり方」とはどのようなことか。本文の内容に即して、80 字以上 100 字以内で述べなさい。

問 3 二重下線部②「還元主義の限界」とは何か。本文の内容に即して、120 字以上 140 字以内で述べなさい。

問 4 二重下線部③「「普通」でいるということ」について、身近な例を取りあげて 80 字以上 100 字以内で述べなさい。

2 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 110 点)

20年くらい前に私は明治のある思想家についてのシンポジウムに出席した。依頼されたとき、私は他の人にした方がよいと辞退しようとした。私はその思想家をそれほど評価していなかったのである。だから批判的なコメントをするかもしれない。それでもよいと主催者がいうので出席したシンポジウムだった。壇上での議論が進行していたとき、1人のパネリストが次のような発言をした。「先生(明治のその思想家)は子どものとき、お母様と一緒に外出されて道端で泥と汗にまみれて働いている人をみかけたそうです。そのときお母様が、あの人たちを見下してはいけませんよ、あの人たちこそが社会の基礎をつくっているのですから、とおっしゃったそうです。先生は生涯この言葉を忘れずに生きたすばらしい方でした」。

この発言に、ついに私は我慢できなくなった。これこそが明治以降の知識人のもっとも悪いところではないか。<sup>①</sup>自分はけっして泥と汗にまみれて働くことはない。いわば知の高みにいるのである。しかし、見下してはいけないという倫理観が自分のすばらしさとして確認されている。価値はその働いている人にあるのではなく、その人たちを見下さないという自分自身にある。そうやって働いている人たちをみて、知の営みに価値をみいだしている自分の限界を感じたとか、このときの記憶をきっかけとして後に違う方向に進んだ、その人たちと話をして生涯つきあうようになったとかいうのなら、それはそれでよいだろう。しかしそんなことは何も起こらなかった。自分は思想の高みにいつづけた。そしてお母さんの言葉を大事にしてきた自分を歳をとってから語った。

この発言を聞いたときに私は何ともいやな雰囲気を感じた。見下さない自己に価値をみいだしている知識人の傲慢さ。しかし傲慢ではないと思っている自己がいて、その自己にまた価値がみいだされている。一種の選民思想である。しかしそのことに気づいてもいない。しかもそのことをすばらしいこととして紹介するとは。

この発言は、現代人がもっている一面を明示しているがゆえに私にはいやなのである。このような論理をいかに打ち破っていくのが、思想のひとつの課題だったのではなかったか。ゆえに、自分の限界がどこにあるのかをみつづけようとしたのが戦後のもうひとつの思想史でもあった。

個人として生きた人間は、すべての価値を自己に還元させたのである。「見下さない」自己こそ価値があり、それを生涯忘れなかった自己に価値がある。トクヴィル(注)が述べた森や湖を農地や牧場に変えた自分自身に感動している人間は、トクヴィルにとってはアメリカ開拓民の精神として映っていたが、それは近代的個人の精神でもあった。

とするとこのような精神の問題点はどこから生まれるのだろうか。その原因のひとつが「A」というところにあるのは確かだろう。紹介された明治の思想家は、土と汗にまみれて働いている人と生涯交わることはなかった。思想家は個としてのまなざしをその人に向け、そこに自分とは違う個をみただけである。つまり働いている人は、けっして自己と交わることのない

い個として、そのような他者としてとらえられていた。そうであるならその他者とは、自分にとっては「見下してはいけない」他者なのか、「見下してもよい」他者なのかでしかない。すなわち見下しているのかいないのかは自己のまなざしのありようとしては同じなのである。しかし自己に価値をみいだす自己肯定の意識としては、その人は見下してはいけない他者であった。

ところが上野村の新太郎さん(注)の世界はそういうものではなかった。新太郎さんにもさまざま他者は存在する。自然も彼にとっての他者であり、村人たちも他者である。さらには村の文化や歴史も他者であり、死者も他者である。だがこれらの他者は、たえず彼と交わっている。自然や村人との関係のなかに自己があり、文化や歴史、先祖や死者との関係のなかに自己がある。新太郎さんの他者は、それらの他者がいなければ自己が成立しない、そういう他者である。

このような自己と切り離すことのできない他者を、切り離された他者に変えたのが近代的個人でもあった。交わることのない他者へのまなざしが成立し、そのまなざしは自己確認の役割をはたす。それはときに「見下さない」自己であり、同情している自己、気遣っている自己、彼らのために何かをしてあげようとしている自己である。そういう自己が自己の価値を肯定させる。だからそれらは、根本的には、「見下している」自己、無視している自己とまなざしのありようとして  
②は変わらない。

だがここで私たちは、自分がある泥沼にはまっていることに気がつく。それは私たちがある種の偽善とともに存在しているということである。この偽善を振り払おうとしても、それから逃れられない自分が存在しているということである。個として自己の存在をつくりあげている人間にはこのような一面があり、近代社会は私たちにそれを強いているといってもよい。

こうして私たちはたえず「他者へのまなざし」に苦悩しなけりばならなくなった。はたして社会的な弱者への私のまなざしは、自己肯定的な自己愛の上に成り立ってはいないだろうか。はたして諸外国の弱者へのまなざしも、同じ問題をはらんではいないだろうか。偽善から完全に逃れることができない以上、「弱者の立場に立って考える」などと言って終わりにしてはられないので  
③ある。

ところがその私たちは、内容は違っても、新太郎さんと同じような世界をつくりだすことがある。それは他者とともに生きようとしたとき、他者とそれがなくてはならない関係をつくりだしたときである。

たとえばその他者は自然でもよい。個としての自然へのまなざしは、客観的な自然を映しだす。自分の外にある自然だといってもよい。それは美しい自然かもしれないし、恐ろしい自然かもしれない。あるいは研究対象としての自然、経済的利益を与えてくれる自然かもしれない。客観的な自然は個が価値をみいだしていく自然だといってもよい。ところが、たとえば農業をはじめると、その自然は違うものになってくる。農業は自然と人間の共同作業である以上、ここでは自然と人間が深く結び合うことになる。自然の営みと自分の営みがたえず結び合うといってもよい。自然があつてこそ自己が存在するという関係が成立してくるのである。

それは家族や友人であつてもよい。その人たちがいてこそ自己が存在するという関係が生まれ

れば、もはや家族や友人は客観的な存在ではない。同じようなことが、たとえば障害者とともに生きようとしている人たちの中でも成立している。一緒になってともに生きる世界をつくろうとしている人たちにとっては、その人たちがいなければ自分自身の生きる世界が成立しないという関係がつくられている。そこには現代的な共同体が成立しているといってもよい。

(内山節『いのちの場所』, pp.129-135, 岩波書店, 2015年より, 一部改変)

(注) トクヴィル フランスの政治思想家。19世紀初頭に『アメリカのデモクラシー』を著した。  
上野村の新太郎さん 群馬県上野村の小さな集落で農林業を営みながら暮らす一住人。

問 1 下線部①「ついに私は我慢できなくなった」とあるが、その理由を本文の内容に即し 100 字以上 120 字以内で説明しなさい。

問 2 文中の空欄 

A
---

 に入る最も適切な文言を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 見下さない

イ 気づいていない

ウ 交わらない

エ 限界を感じない

問 3 下線部②「それらは、根本的には、「見下している」自己、無視している自己とまなざしのありようとしては変わらない」とあるが、それはどういうことか。本文の内容に即し 30 字以上 50 字以内で説明しなさい。

問 4 下線部③「弱者の立場に立って考える」などと言って終わりにしてはられない」とあるが、それはどのようなことか。本文の趣旨を説明した上で、あなたが考える例をあげて 150 字以上 180 字以内で述べなさい。

3 次の英文を読んで、あとの問いに答えなさい。(配点 140 点)

この部分の問題は、著作権の関係により公開できません

(Clara E. Hill, *Helping Skills: Facilitating Exploration, Insight, and Action*, pp.14-15, American Psychological Association, 2009 より, 一部改変)

(注) nonjudgmental 偏っていない      stimuli 刺激, 鼓舞      crucial 決定的な, 必須の  
inclination 意向, 傾向      integral 不可欠な, 組み込まれた  
integrate 統合する      awkward ぎこちない, ぶざまな



問 1 下線部①を日本語に訳しなさい。

問 2 文中の空欄(ア)に入る最も適切な前置詞を1つ書きなさい。

問 3 下線部②について、代名詞 *them* が指示する名詞句を、本文から抜き出して書きなさい。

問 4 次のAからDの記述のうち、下線部③の具体的例示と考えられるものには○を、そうでないものには×を、本文の内容にしたがってそれぞれ書きなさい。

- A. 相談者の話を、丁寧に、そして熱心に聴くが、自分の考えを決して無理に相手に押し付けない。
- B. 相談者の抱える問題の解決には、相談者自身よりむしろ、援助する側の行動こそが重要だ。
- C. 相談者の抱える問題は、援助する側が適切に理解すれば良いのであって、相談者自身が考える必要はない。
- D. 自分の学んできた専門的知見に基づき、状況を適切に判断し、相談者の意思にかかわらず適切に助言を行う。

問 5 下線部④の“*tolerance for ambiguity*”(多義的状況への耐性・寛容性)とはどのような能力を表すかについて、本文で述べられている箇所を抜き出し、最初の3語を書きなさい。

問 6 文中の空欄(イ)と(ウ)に入る語の組み合わせとして正しいものを、次のAからDの中から選び、記号で答えなさい。

- A. イ：confusing      ウ：discouraged
- B. イ：confusing      ウ：discouraging
- C. イ：confused      ウ：discouraged
- D. イ：confused      ウ：discouraging

問 7 次の語を並べ替えて、文中の空欄(エ)に入る、最も適切な英語の表現を作りなさい。  
about / assisting / at / attempts / initial / others / stories / their

- 4 次の表は内閣府が平成27年に行った「第8回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」の資料をもとに、作成したものである。この表を読み、あとの問いに答えなさい。(配点110点)

表 60歳以上における親しい友人の有無(性別および年代別)の割合

		人数(人)	同性の友人 だけ(%)	異性の友人 だけ(%)	同性・異性の 両方がいる(%)	いずれも いない(%)	わからない (%)	
日本	全体	1,105	57.5	1.9	13.8	25.9	1.0	
	性別	男性全体	504	45.0	3.2	20.4	29.8	1.6
		女性全体	601	67.9	0.8	8.2	22.6	0.5
	年代別	60～64歳	201	64.7	2.0	14.4	18.9	—
		65～69歳	292	57.9	2.7	19.9	19.2	0.3
		70～74歳	223	57.0	3.1	13.5	25.1	1.3
		75～79歳	171	53.8	—	9.4	35.7	1.2
80～84歳		133	54.1	—	9.8	34.6	1.5	
85歳以上		85	52.9	2.4	7.1	34.1	3.5	
アメリカ	全体	1,003	39.8	3.2	41.8	11.9	3.4	
	性別	男性全体	488	30.9	4.7	47.5	12.9	3.9
		女性全体	515	48.2	1.7	36.3	10.9	2.9
	年代別	60～64歳	216	34.3	5.6	46.3	10.6	3.2
		65～69歳	215	38.1	1.9	45.6	12.1	2.3
		70～74歳	①	②	2.3	46.5	9.3	3.5
		75～79歳	163	41.7	3.7	39.9	13.5	1.2
80～84歳		135	51.9	1.5	31.1	10.4	5.2	
85歳以上		102	38.2	3.9	33.3	17.6	6.9	
ドイツ	全体	1,008	③	④	47.6	17.1	0.7	
	性別	男性全体	441	24.3	3.2	53.5	18.1	0.9
		女性全体	567	38.4	1.8	43.0	16.2	0.5
	年代別	60～64歳	230	32.6	2.6	51.3	13.0	0.4
		65～69歳	212	34.4	3.8	50.0	10.8	0.9
		70～74歳	231	29.4	1.3	51.5	16.9	0.9
		75～79歳	137	35.8	2.9	49.6	10.2	1.5
80～84歳		109	33.0	0.9	35.8	30.3	—	
85歳以上		89	27.0	2.2	33.7	37.1	—	
スウェーデン	全体	1,000	28.1	3.2	59.2	8.9	0.6	
	性別	男性全体	464	21.8	4.1	61.9	11.4	0.9
		女性全体	536	33.6	2.4	56.9	6.7	0.4
	年代別	60～64歳	182	23.6	2.7	65.4	7.7	0.5
		65～69歳	268	28.7	2.6	60.1	8.2	0.4
		70～74歳	261	30.7	3.4	58.2	7.3	0.4
		75～79歳	131	31.3	2.3	59.5	6.9	—
80～84歳		104	27.9	4.8	52.9	14.4	—	
85歳以上		54	20.4	5.6	50.0	18.5	5.6	

注) 四捨五入の関係で割合の合計は必ずしも100.0にならないが、①～④の含まれる行は100.0である。  
 (内閣府『平成27年度第8回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査』(PDF版)、  
 <<http://www.8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h27/zentai/index.html>>, 2016年をもとに作成)

問 1 表をもとに、アメリカの 70 歳代全体のうち、同性の友人がいる人の数を求めなさい。解答は小数第 1 位を四捨五入して整数値で記すこと。

問 2 表の③及び④に入る数値を求めなさい。解答は小数第 2 位を四捨五入して小数第 1 位まで記すこと。

問 3 表に示された調査結果を国別に比較したときに、どの年代においても日本が他の 3 カ国に比べて特徴的なのはどのような点か。30 字以上 40 字以内で述べなさい。

問 4 表に示された調査結果において各国に共通してみられる男女差のうち、数値の開きが大きいのはどの項目であり、男女でどのように異なるのか。20 字以上 30 字以内で述べなさい。